
平川市産業振興に係る基本構想

《概要版》

- 1 産業振興基本構想策定の目的、位置づけ
- 2 平川市の概要
- 3 産業振興に向けた取組の基本方針と方向性
- 4 取組の方向性
- 5 産業別体系図

1.産業振興基本構想策定の目的、位置づけ

➤平川市を取り巻く環境変化に対応し、**持続可能なまちづくり**を実現するため、平川市の**産業振興の方向性**を明確にし、外的要因の変化にも対応しうる**強い地域経済を確立**する。

目指す将来像
「あふれる笑顔 暮らし輝く 平川市」

基本政策

- 「魅力あるひとづくり」
 - 「**活力あるしごとづくり**」
 - 「住み続けたいまちづくり」
- 2-1 地域特性を活かした農林業
 - 2-2 活力ある商工業の振興と雇用の創出
 - 2-3 地域資源を活かした観光・物産

第2次平川市長期総合プラン
後期基本計画 (R4~R8)

企業誘致を含め、拠点の用地確保に際しては、都市計画マスタープラン地域別構想への位置付けが必要となる。

「持続可能なまちづくり」の**将来像**

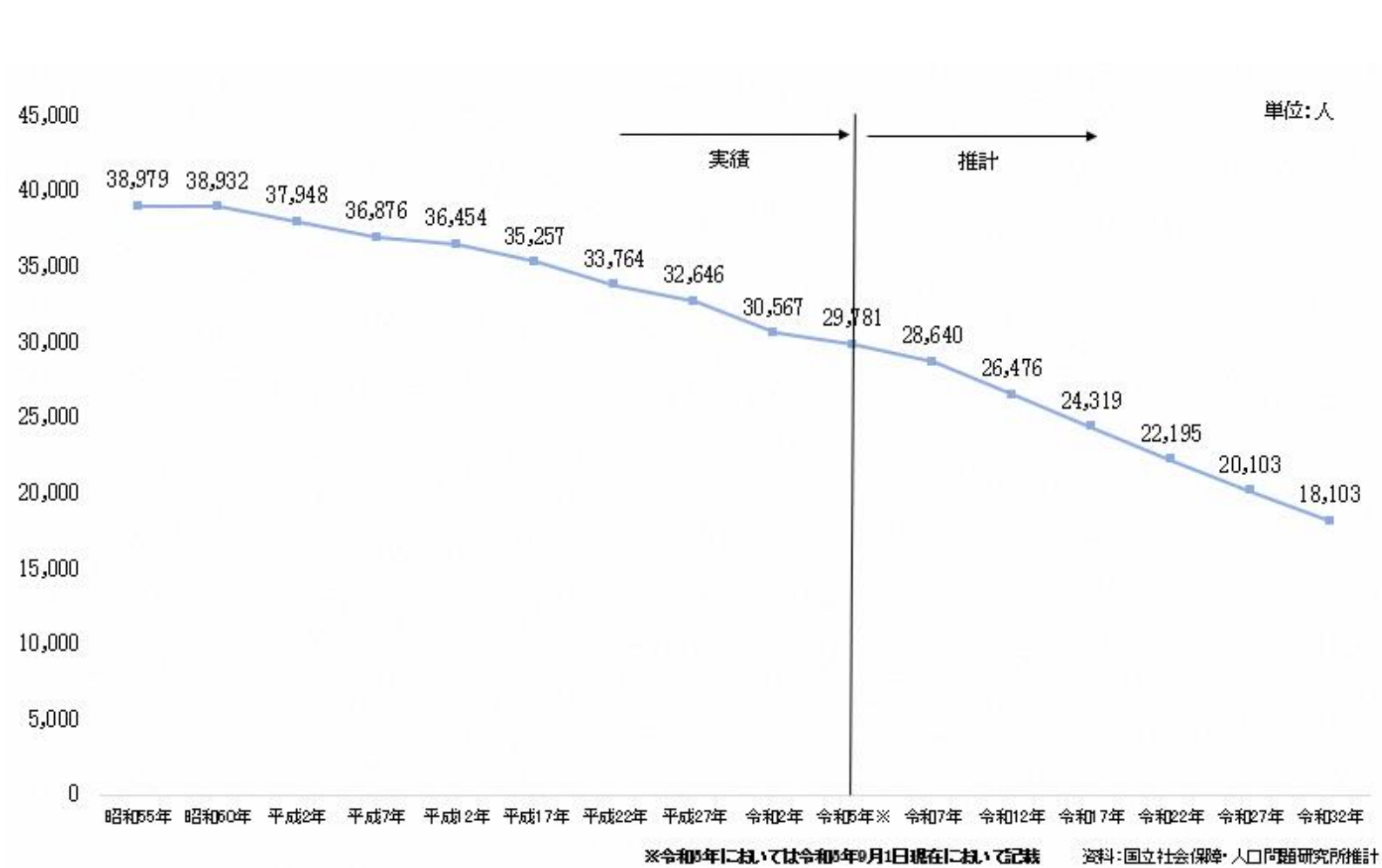
『平川市の強みである
農業をベースとするさまざまな地域資源を食と観光に結びつけ、
地域の事業者等が連携、協力して、
付加価値の高いモノやサービスを産み出すことにより、
稼ぐ力と域内経済循環を高め、**強い地域経済を確立**する。』

平川市産業振興基本構想
(R5策定)

平川市都市計画マスタープラン
(H22策定)

2.平川市の概要 ～人口動向～

- 令和5年人口は29,781人。5年ごとの減少率はH22年△4.4%、H27年△4.9%、R2年△4.8%と**人口減少が加速**。
- 国立社会保障・人口問題研究所の推計では、**令和32年（2050年）の総人口は18,103人**（令和5年比11,678人減、△39.2%）
- 総人口に占める生産年齢人口（15歳以上64歳以下）の割合と老年人口割合の差が縮小し、高齡化が進展、**令和27年には老年人口と生産年齢人口が逆転**するなど、生産年齢人口の負担拡大。
- 「地方の人口急減は、労働力人口の減少や消費市場の縮小を引き起こし、**地方の経済規模を縮小**させる」と言われている。



総人口推移

※R2は年齢不詳につき、下図と総数一致しない

単位:人	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年
総人口	38,979	38,932	37,948	36,876	36,454	35,257	33,764	32,646	30,567

2.平川市の概要 ～地域産業構造～

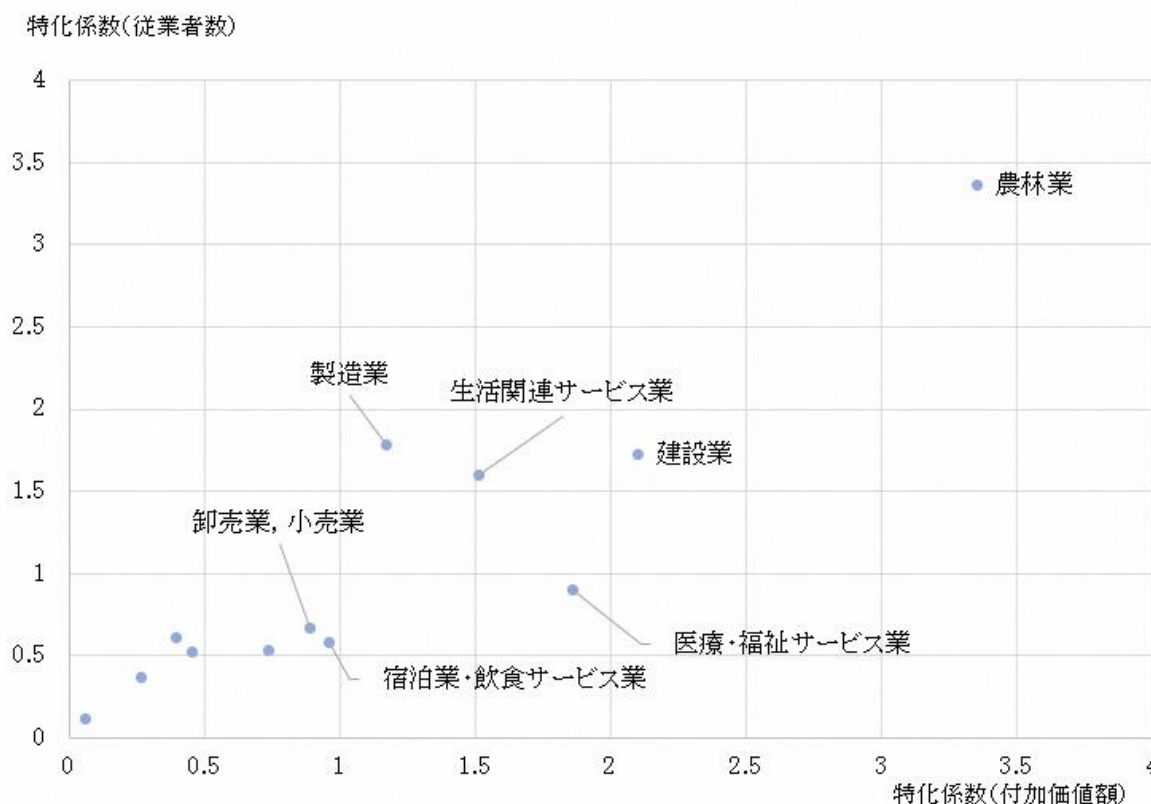
- 産業別産出額は令和2年度で756億円とコロナ禍の影響を受け、800億円を割り込む。特に、2次産業が前年比77億円の減少（△34.9%）
- 平川市の産業構造分布図をみると、農林業、製造業、建設業、生活関連サービス業、医療・福祉サービス業が基盤産業と考えられ、特に、付加価値額（商品やサービス等の販売額から原材料費等の中間投入額を差引いた額）、従業者数ともに**農林業が全国と比べて優位性を持つ。**
- 地域経済循環を青森県と比較してみると、地域外からの流入が多いものの、流出も多く、**地域経済循環率が66.6%と低い。**

産業別総生産額推移

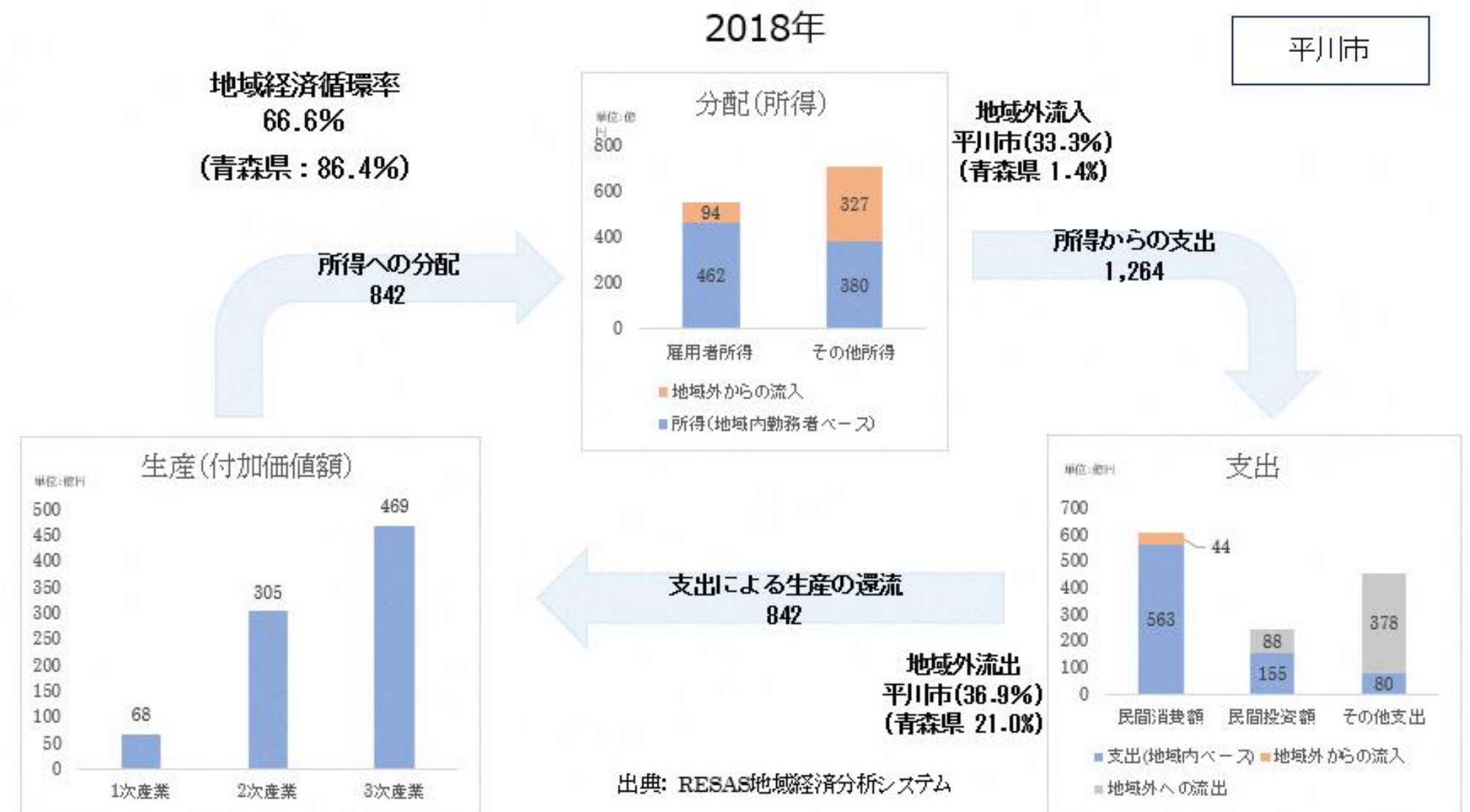
単位：百万円

	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	R2/H27
一次産業	7,150	7,701	6,941	6,959	7,203	7,276	101.8%
二次産業	25,820	24,326	22,214	28,408	24,491	16,815	65.1%
三次産業	50,226	50,293	51,080	51,207	51,473	51,548	102.6%
合計額	83,196	82,320	80,235	86,574	83,167	75,639	90.9%

産業構造分布図



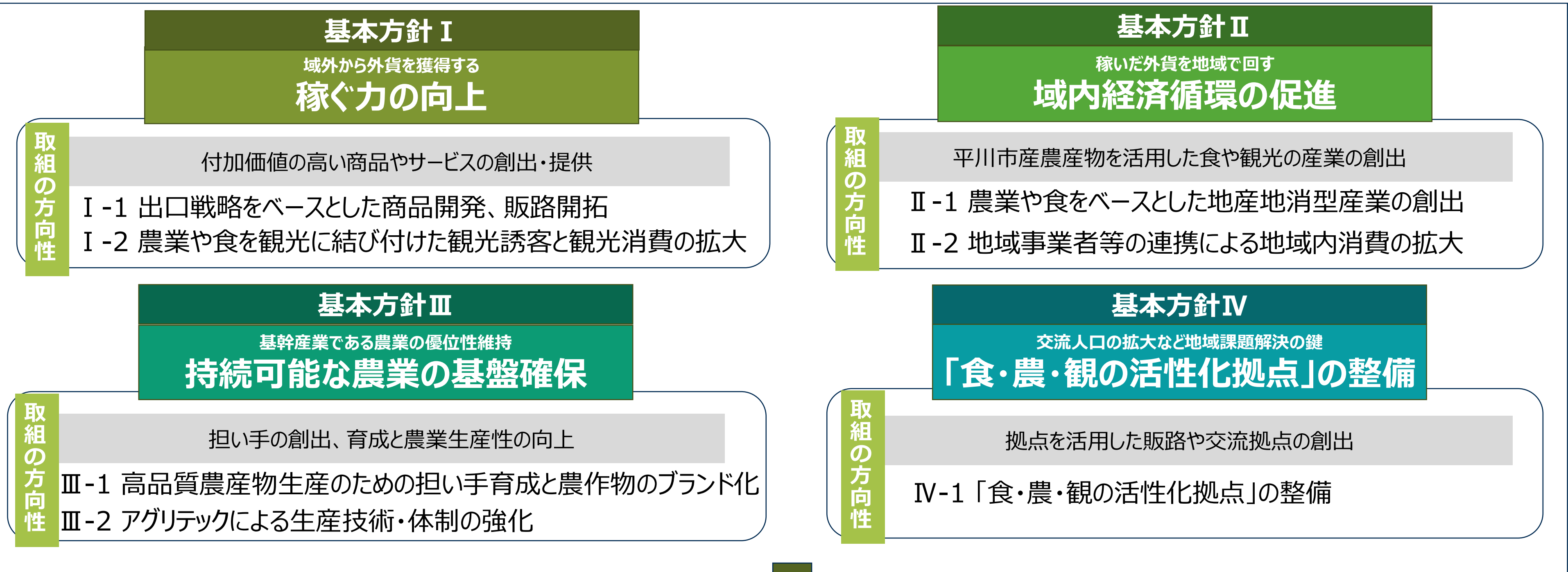
地域経済循環図



3. 産業振興に向けた取組の基本方針と方向性

【現状】・少子高齢化や若者の県外流出による人口減少
 ・農業従事者の高齢化と後継者不足や経営耕地面積の減少

・生産年齢人口の減少や消費市場の縮小による地域経済の縮小



☆波及効果 外貨獲得や本構想に関連する分野の企業誘致が期待される

平川市が全国に比べて優位性のある農業を食や観光と結び、地域事業者等との連携のもと、強い地域経済を確立する。

4. 取組の方向性「Ⅰ-1 出口戦略をベースとした商品開発、販路開拓」

現状・課題

平川市の6次産業化

- 市内認定農業者及び直売所出荷者のうち73%が6次産業化に興味があるが、取組は39%のみ（R2年調査）。
- 物産のEC販売等、ダイレクトに消費者とつながる販売がほぼなされていない。
- 平川市の豊富な農産物を活用し、食産業の創出が望まれる。

6次産業化が抱える課題解決の方向性

- 地域の第1次産業者から第3次産業者まで、共通のビジョンを持って結びつき、相互作用を繰り返しながら生産、商品開発から販売まで取組を進める。

ワーキンググループ講師（五十嵐氏、白田氏アドバイス）

- 加工品等の魅力が短期間で伝わる方策
→地域にある「個の魅力（モノ、場所、店、人物等）」を集めて「強い商品『〇〇の平川』」として売り出す
- 付加価値向上のポイント
→新たな価値づけ（パッケージがおしゃれでかわいい）や平川ならではのもの活用（蔵出しりんごなど）
- ターゲットは青森県民と青森県を訪れる観光客
→最初は、地元で「ヒット商品」をつくり、消費者の口コミで認知を広げていく。まずは、既存商品ブラッシュアップ

ワーキンググループでの意見・アイデア

- ・希望ロットに適した加工場がない
- ・販路についても体系化されたものがない

取組の方向性

Ⅰ-1-a 出口戦略にあわせた高付加価値加工商品開発

取組① 平川ならではの地域資源調査や消費者ニーズ調査

商品やサービスの創出に向け、平川市にある様々な地域資源（既存商品含む）を調査するとともに、出口戦略構築のための消費者ニーズ調査を行う。

取組② 「平川市6次産業化プラットフォーム（仮称）」の運営等

外部専門家を招聘し、地域一体型6次産業化を推進するためのワークショップ等を開催する。

取組③ 農産物と連動したブランディング

農産物とその加工品を連動させたブランディングを展開する。

Ⅰ-1-b 多様な販路開拓

取組① 売れるモノづくりに向けた販路開拓支援

新たな商品やサービス等について、外部専門家やバイヤーを活用し、商談会やテストマーケティングなどを行う。

取組② ダイレクトに消費者とつながる販路構築、拡大

ダイレクトに消費者とつながる販路として、ふるさと納税の利用拡大を中心に展開していく。

取組③ 地域イメージのブランド化

物産と観光のリンクにより、地域イメージのブランド化を実現していく。

Ⅰ-1-c フードテック活用による高付加価値化

取組① 次世代技術研究会（仮称）での検討

取組② フードテック企業と連携した食産業創出

取組③ 大学や研究機関等と連携したフードテック技術の開発、実証

現状・課題

平川市の観光入込状況等

- ▶ 観光入込客数は、R4が400千人（前年比117%）とコロナ前に近付いている。

青森県を取り巻く状況

- ▶ 中国SNS「Weibo」で自治体フォローランキングは、青森県がダントツ1位。
- ▶ 青森-ソウル便が令和6年1月に再開、台湾チャーター便も1月に運航。
- ▶ 青森県内に寄港するクルーズ船の予約数は過去最高の45回を予定。

課題

- ▶ 地域資源（温泉やねぶた、造園業、獅子踊など）の活用が不十分である。
- ▶ 周遊・滞在につながる施設が少なく、観光コンテンツも点在し、連携が希薄。
- ▶ 旅行商品化への取組が少なく、また、受入態勢が脆弱である。
- ▶ 観光消費につながる「食」や「土産物」が弱い。

取組の方向性

取組①国庫補助事業等を活用した観光振興事業等の展開

- ・農業をベースに、体験型コンテンツ等の開発やブラッシュアップを行う。
- ・観光客の滞在時間を伸ばすためのコンテンツの開発を進めるほか、温泉等を活用した宿泊施設の魅力向上やファームステイの利用拡大を図る。
- ・ランドオペレーターや現地コーディネーター等の人材の育成といった取組を通じて受入態勢を整備する。

取組②観光事業者等の連携強化

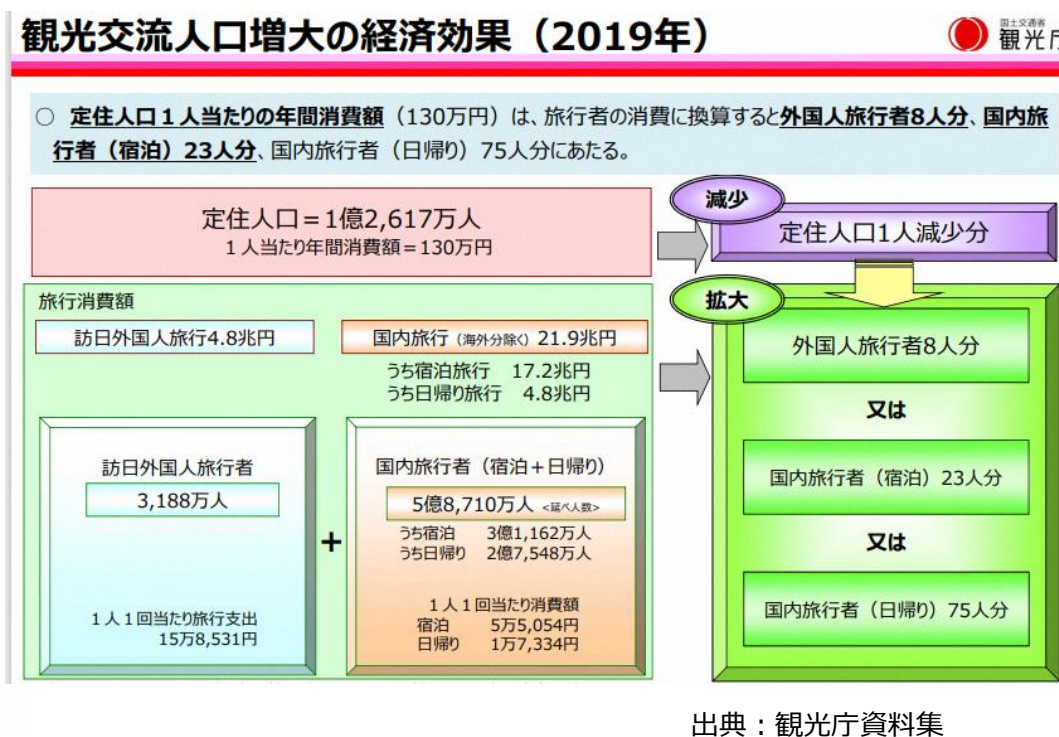
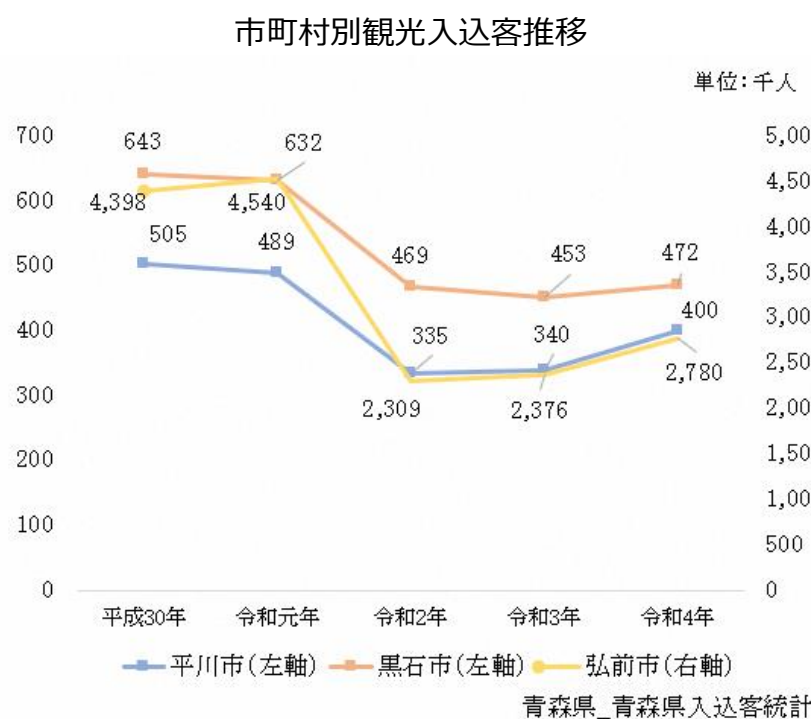
- 平川市や平川市観光協会をはじめ、宿泊事業者、交通事業者、飲食事業者、農家など関係者等が連携して、観光振興事業等に取り組む。
- ・平川市の観光振興の中核を担う観光協会について、組織体制の強化を図る。
- ・市のシティプロモーションと連携し、農業や食、観光に関するヒト・モノ・コト（体験）などの情報を発信するなど、地域イメージの向上を図る。

取組③インバウンド観光や広域観光の推進

- ・観光客のニーズを把握するとともに、インバウンド向けの観光コンテンツの開発や多言語化対応、コミュニケーションツールの導入など受入態勢の整備を行う。
- ・友好交流協定を結んでいる台中市については、県と連携しながら情報発信や誘客活動を展開する。
- ・（一社）クランピオニー津軽と連携し、周辺市町村と連携した周遊観光を推進する。

ワーキンググループでの意見・アイデア

- ・アップルガーデン（りんご畑）で平川サガリバーベキュー体験
- ・りんご樹を活用した薪サウナや薪ストーブ、燻製料理



4. 取組の方向性「Ⅱ-1 農業や食をベースとした地産地消型産業の創出」「Ⅱ-2 地域事業者等の連携による地域内消費の拡大」

現状・課題

地域経済循環

- 所得をみると地域外からの流入が33.3%（県1.4%）と多く、市外勤務者の給与や年金等の流入が要因と思われる。
- 一方、支出をみると、民間投資額などの地域外への流出が36.9%（県21.0%）と多く、結果的に地域経済循環率が66.6%（県86.4%）と低い。

平川市の地産地消の状況

- 食ラボの市内利用者及び6次化セミナーの参加者が低迷している。
- 食文化として古くから伝わる地元料理を提供する店舗や機会が少ない。

課題

- 地域の需要に応じた産業を地域内で創出する人材の育成確保や、農産物を活用した地産地消型産業の創出。
- 平川市の農産物を提供するレストランや楽しめる場所の確保。

取組の方向性

Ⅱ-1 農業や食をベースとした地産地消型産業の創出

ビジネスプランコンテストや起業・創業のための研修会の開催など事業や産業を直接・間接的に生み出せる人材の育成や、UIターンやその他制度を活用した人材誘致により、地域資源を用いた事業等の創出支援に取り組む。

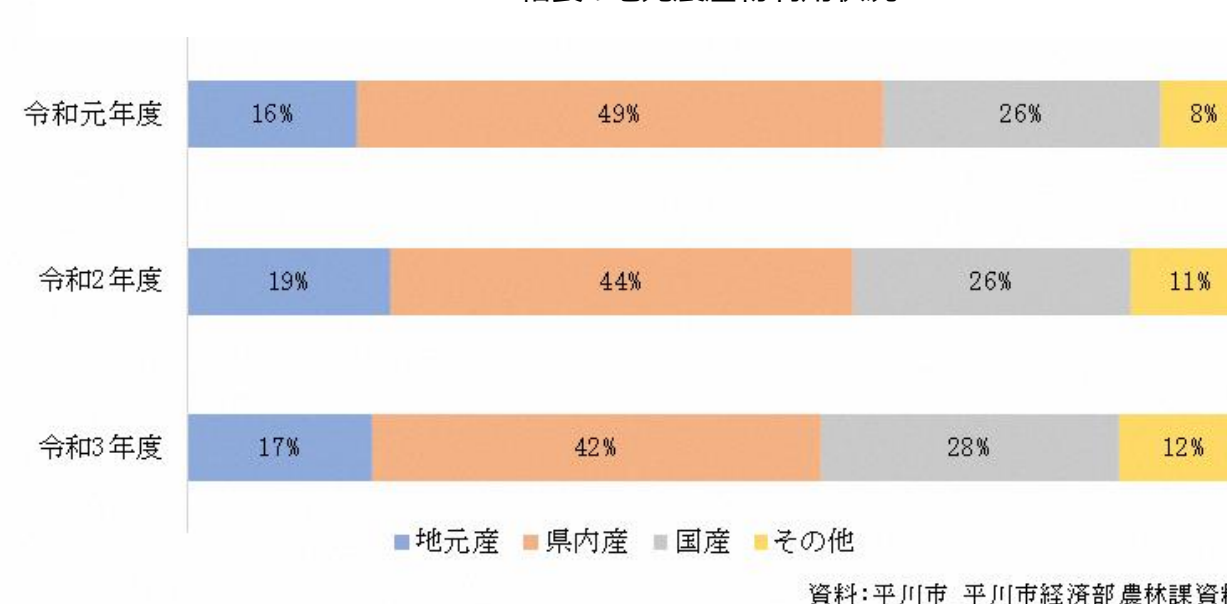
Ⅱ-2 地域事業者等の連携による地域内消費の拡大

地域の農産物等を活用し、消費者のニーズに対応した商品づくりを行い、産直施設での販売や飲食施設等での提供のほか、高齢化の進展を踏まえた提供システムを構築する。

地域経済循環図



給食の地元農産物利用状況



ワーキンググループでの意見・アイデア

- ・平川産米でおにぎり専門店や、碓ヶ関の山菜とあわせて炊き込みご飯
- ・りんごとミニトマトのミックスジュース
- ・冷麺の材料（市内事業者が製造するりんご酢、麺、りんごや桃のトッピング、平川サガリチャーシューなど）を使って冷麺のまちづくり
- ・桃やりんご、トマトを活用したクラフトビール

4. 取組の方向性「Ⅲ-1 高品質農産物生産のための担い手育成と農作物のブランド化」「Ⅲ-2 アグリテックによる生産技術・体制の強化」

現状・課題

農業従事者の育成・確保

- 農業従事者の高齢化や後継者不足により、農家数が減少している。
- りんごやミニトマトでは、人手に頼る作業や熟練者でなければできない作業が多い。

農産物のブランド化

- 国内市場の縮小、外食・中食や健康食の需要増など消費構造が変化している。
- 良いモノを作る = 高く売れる、というサイクルが確立できていない。

新たな農作物の作付けの検討

- 気候変動や農業資材等の高騰を考慮し、作付転換を検討する必要がある。

県内におけるアグリテックの取組状況

- 近年、リモートセンシングを活用した「青天の霹靂」の生産支援や、大規模水田作スマート農業の実証試験、りんごではロボット草刈機などの導入が進んでいる。
- 平川市では、R3年度からスマート農業導入支援事業を実施し、R4年度は9件の利用実績がある。

取組の方向性

Ⅲ-1 高品質農産物生産のための担い手育成と農作物のブランド化

取組①新規就農者等の担い手の育成

農業団体等と連携し、新規就農者向けの包括的支援体制を強化する。

取組②農業経営体の状況に応じた生産体制の強化

新規就農者等に対し、経験豊富なベテラン農業者がノウハウ、経験を伝える体制を構築するほか、弱体化が進む生産組織とそれを構成する兼業農家等の連携強化を促進する。

取組③主要作物のブランド化

農産物等のストーリーや農家の思いなど付加価値を高める情報を発信し、産地の認知度向上と差別化を図る。

取組④マーケットニーズに応えた振興作物の推進

10年の農業のあり方を示す地域計画や国、県の農業施策の方向性やマーケットニーズの変化を踏まえながら、振興作物の栽培強化や生産性向上を図る。また、マーケットインの発想から稀少作物を生産する農業者の発掘も行う。

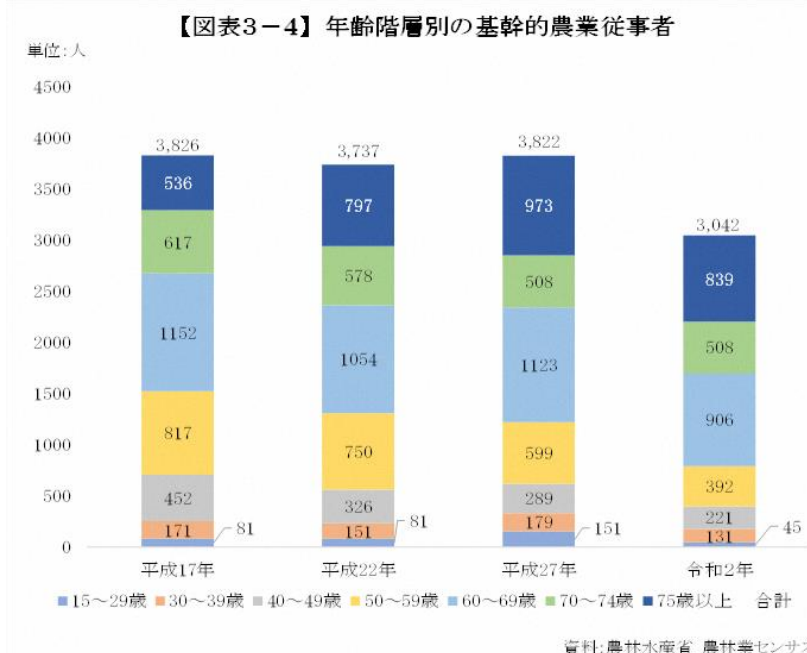
Ⅲ-2 アグリテックによる生産技術・体制の強化

取組①産学官連携によるアグリテック普及促進

平川市内での導入促進に向けた検討を産学官が連携し、組織的に行う。

取組②次世代技術研究会（仮称）での検討

平川市の農業実態にあわせた次世代技術の導入に向け、大学や研究機関、企業等をメンバーとする研究会を立ち上げ、検討を行う。



ワーキンググループでの意見・アイデア

- ・優れた技術を有する生産者と繋がりがなく、相談窓口も分からないことから、生産技術が向上しない
- ・消費者の求める傾向やニーズ、評価や認知度の向上を図るためにどうしていけばいいかわからない

4.取組の方向性「IV-1.『食・農・観の活性化拠点』の整備」～取組の効果を最大限に獲得～

現状・課題

- ①地産地消の推進
 - ・地産地消を通じた地域間交流やビジネス、雇用の創出は今後のまちづくりに不可欠
- ②既存産直の機能が限定的
 - ・農産物の数量確保が困難
 - ・観光客の利用が少ない
 - ・産直が農産物販売に偏り、複合的な機能や魅力が不足
- ③ねぶた展示館の魅力創造
 - ・観光施設としての機能が不足
 - ・老朽化が進行
- ④人材の育成
 - ・事業や産業を生み出せる人材確保や商品企画やデザインなど、クリエイティブな能力を持つための人材が不足
- ⑤交流人口の拡大
 - ・地域のにぎわいや魅力創出を進めるため、交流人口の増加は不可欠

「食・農・観の活性化拠点」の整備の必要性と効果

- ①まちなぎわいや魅力・コミュニティの創出

少子高齢化や人口の域外流出などにより、まちなぎわいや地域コミュニティが低下していることから、平川市としての魅力の創出が不可欠であるほか、社会的孤立を防ぐコミュニティの創出が必要となる。
- ②活性化拠点が地域課題解決の鍵

平川市が優位性を持つ農業に食・観光を結び付けることにより、「ヒトの流れ」と「モノの流れ」を新たに作り出し、交流人口の拡大や外貨の獲得の起爆剤になる。

特に、平川市のモノやサービスの価値を高める場づくりを行うことで、人材の発掘、育成、集積や情報発信の強化により、平川市の認知度向上が図られる。

コンセプト：「平川市の農業や食で人と人がつながってワクワクする拠点」

大人も子どもも高齢者も若者も、平川市の優位性のある農業や食をコンテンツに、多様な価値観のもとでワクワクしながらつながって、新しいコミュニティを創り出す場となる。

ワーキンググループでの意見・アイデア

- ・通年を通して楽しめる滞在型施設（特に、冬の農業など）
- ・家族が思い出や子どもの成長をプレゼントできる場所

コンセプト① 「人が集まって（交流して）ワクワク」

- ▶交流機能

地域の人々が様々なイベントや教室、展示会等を開催し、交流することでゆるやかなコミュニティづくり
- ▶情報発信機能

情報インフラを整備し、利用者や消費者との双方向の情報発信やマーケティング機能の発揮、ライブコマースやSNS撮影が可能なスタジオなど、戦略的な情報発信を行う

コンセプト② 「人が楽しんで（体験して）ワクワク」

- ▶観光機能

平川ねぶたの囃子体験や伝統芸能体験を提供

平川市の農業、歴史、生業体験のハブとしての機能と、体験農園や生産者との交流体験など、様々な体験を提供
- ▶物販、飲食機能

質の高い特産品販売、高付加価値加工品や他地域の特産品を集めたセレクトショップ、地産地消レストランや高齢者向け宅配商品の開発等

コンセプト③ 「人が育って（学んで）ワクワク」

- ▶モノづくり・インキュベーション機能

農業を中心としたモノづくり事業として「商品開発Lab」「Craft food Factory」や事業創造スタジオなどで新事業創出等、地域産業の創出と幅広い年代の人材育成を行う
- ▶食育・教育機能

農業や食に関する学びの場や職業体験イベントの開催
- ▶次世代技術の開発・実証機能

アグリテックやフードテックなどに取り組む企業や研究機関と、次世代技術の開発、実証を行う

○施設候補地調査箇所

- ・県道13号上（黒石～大鰐）
- ・国道102号上（弘前～黒石）
- ・国道7号線上（弘前～大鰐）
- ・その他（中心市街地）

○「ねぶた展示館」について

「ねぶた展示館」については、個別の整備とするか拠点と一体整備とするか、令和6年度に幅広く意見聴取を行い、今後の方向性を決定していくこととする。

5. 産業別体系図

1次産業（生産）



2次産業（加工）



3次産業（販売）

基本方針Ⅲ.
持続可能な農業の
基盤確保

Ⅲ-1 高品質農産物生産のための
担い手育成と農作物のブランド化

Ⅲ-2 アグリテックによる
生産技術・体制の強化

基本方針Ⅰ.
稼ぐ力の向上

I-1 出口戦略をベースとした
商品開発、販路開拓

I-2 農業や食を観光に結び付けた
観光誘客と観光消費の拡大

基本方針Ⅱ.
域内経済循環の促進

Ⅱ-1 農業や食をベースにした
地産地消型産業の創出

Ⅱ-2 地域事業者等の連携による
地域内消費の拡大

基本方針Ⅳ.「食・農・観の活性化拠点」の整備

食・農・観を結び付けることにより強い地域経済を確立する

